

# 今治市村上海賊ミュージアム所蔵

## 『ばけ物三十六歌仙』を読む

高杉 遊葉 名護 峻河  
平田 沙帆 三宅 遥  
境 海 藤井 佐美

(尾道市立大学伝承文化研究会)

### 序

『ばけ物三十六歌仙』は、今治市村上海賊ミュージアム(旧称、今治市村上水軍博物館、以下「ミュージアム」)に所蔵される江戸時代後期のかつたである。国立歴史民俗博物館には当該資料を元に制作された複製品が展示されているが、未だ本格的な研究はされていない。

本稿は二〇二〇年にミュージアムで撮影した原本資料写真を元に、翻刻並びに読解を初めて試み、その稀少性を広く紹介するものである。

中世期における瀬戸内水軍としての活躍が知られる村上家の伝来品が現所蔵先に移管された経緯は、『今治市村上水軍博物館保管 村上家文書調査報告書』(二〇〇五年、以下「調査報告書」)に詳しい<sup>1)</sup>。村上景親の子孫、山口県周防大島町(旧・大島郡東和町)に伝来する多数の文書類が「村上文書Ⅰ」としていったん整理され、追加整理された「村上文書Ⅱ」には文書の他に什器・凶書・道具類が新たに含まれており、当該資料も調査報告書の目録に以下の通り記載されている。

名称 化け物三十六歌仙

頁数 72

箱1点 絵札36点 読み札34点 小冊子1点

整理番号 道具 0010

その後、ミュージアムに残された常光徹氏の閲覧時所見（二〇一〇年）によれば、絵札35点、読み札34点であったことが記録されている。この時点で絵札（取り札）の枚数が一枚少ない点はミュージアムでも目録作成時の誤記と推測されており、長年におわたる保存・整理上の事情等が推測される。いずれにせよ、常光氏の閲覧が国立歴史民俗博物館における複製品の制作と展示に結びつき、ミュージアムでは原本資料の部分展示が行われている。

従来、当該資料に関する本格的研究が行われてこなかったのは、このように絵札と読み札が揃っていない欠損に加え、札によつては甚大な破損がある点も理由といえよう。三十六歌仙の本歌に基づく和歌と化け物を結びつける魅力的な内容でありながら、伝来品として理想的な形態が保たれていないのである。これらの点が読み札の翻刻をはじめ、絵札に描かれた化け物の解説、そして札の組み合わせに関わる分析を困難にしてきた。しかし、江戸時代後期に

おける「妖怪かるた」の系譜に位置づけられ、化け物と和歌を結びつける室内遊具として他に類を見ない珍品であることは確かである。

本稿では形態の不完全さに基づく諸問題も併せて、瀬戸内、村上海賊に伝来してきた知の世界を解き明かす。

#### 【担当】

○読み札の翻刻、絵札の整合作業、欠損の諸問題（研究会全員）

○絵札と読み札の解説文（高杉遊葉、名護峻河、平田沙帆、三宅遙）

○解説文の補足、傍証資料等の情報提供（境海、名護峻河、藤井佐美）

○掲載写真と原稿データの整備、凡例、参考文献一覧と索引作成（名護峻河）

○写真撮影、序、結、注、付記、入稿整備（藤井佐美）

#### 【道具箱】

箱 縦11.5 横8 高さ2 糎

絵札と読み札 縦4.5 横3.2 糎

## 解説

『ばげ物三十六歌仙』は、藤原公任によって選定された平安時代の優れた歌人三十六人、三十六歌仙の詠歌を本歌として、化物に関連した内容に詠みかえられた化物かるたである。

論文化に当たり、試みに化物を「付喪神」「名のある化物」「その他」の三つに分けて分類した。かるたに見える化物を右の三つに分類し、更に歌人の五十音順で細かく配列を組んでいる。

「付喪神」の項目には、日常の道具が化物化しているもので、「風呂桶の化物」のように固有の化物名を有さないものを配した。「名のある化物」の項目には、固有の化物名を持つものを中心に配してある。「その他」の項目には、以上の二項目に属さないものを配しており、動物名と同一名で記載されているものや当研究会の見解として「付喪神」の定義外としたものなどをまとめた。また、化物名が明らかでない絵札のみものは「欠損の諸問題」に別立した。

また都合上「かわ太郎」「かわうそ」については、いずれも20番として同項での立項とした。



当研究会では、読み札と絵札の組み合わせを暫定的に決め、それぞれに基本解説や鑑賞を付した。担当箇所については以下の通りである。

### 〈担当箇所〉

高杉遊葉 6、7、11、13、21、22、28、29、32  
名護峻河 2、4、8、12、18、19、27、34、35  
平田沙帆 5、10、17、20、23、24、25、31  
三宅 遥 1、3、9、14、15、16、26、30、33

また、化物の名称については基本的に読み札の呼称によったが、読み札に名称が出てきていないものや化物の特定が難しいものは、検討の上で化物名を特定、或いは暫定的にそのモチーフの名称を付した。

なお、当解説の鑑賞における通釈には意識を多く含む。

### 〈凡例〉

一、底本は、今治市村上海賊ミュージアム所蔵『ばけ物三十六歌仙』である。

一、各項目には、かるたの絵札と読み札を挿画した。

一、翻刻の方針は以下の通りである。

イ、字体及び表記は底本の通りとした。

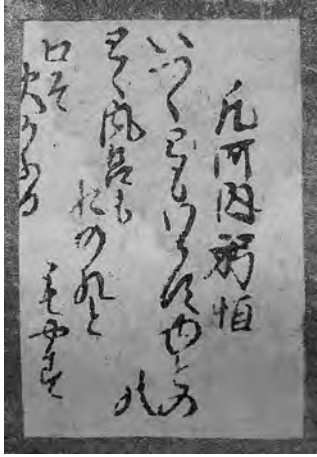
ロ、歌人名は各項目冒頭に化物名と共に付した。

ハ、和歌は行取りをあらため、翻刻本文は濁点等付さずにおいた。

ニ、翻刻不能箇所については ○ によって代替し、また、翻刻において当該箇所文字の仮候補が上がった場合は、その候補を括弧書きで記した。

付喪神

1 風呂桶―凡河内躬恒



よしのの山は雪ふる（『後撰和歌集』一九）

風呂桶…器物に長い年月が経つことで魂（霊）が宿り、化けたものを付喪神という。名前には神が入っているが妖怪として扱われ、ここでは口のように描かれているところに薪をくべ、湯をわかすのだと考えられる。

鑑賞

【通釈】どこでもわかす……ひとりでに燃やす口には火がついている。

通釈がしづらいが、勝手に沸く風呂があれば便利なのにといい願望が現れた歌か。中の水は青くなっており、沸いた風呂というよりは水風呂、これから沸かす風呂に見える。本歌の雪に合わせて寒々しくしているのだろうか。

翻刻…いつくともわかすゆとののとく風呂もおのれ  
ともやす口そ火かふる

本歌…いづくともはるのひかりはわかなくにまたみ

## 2 酒壺―大中臣頼基朝臣

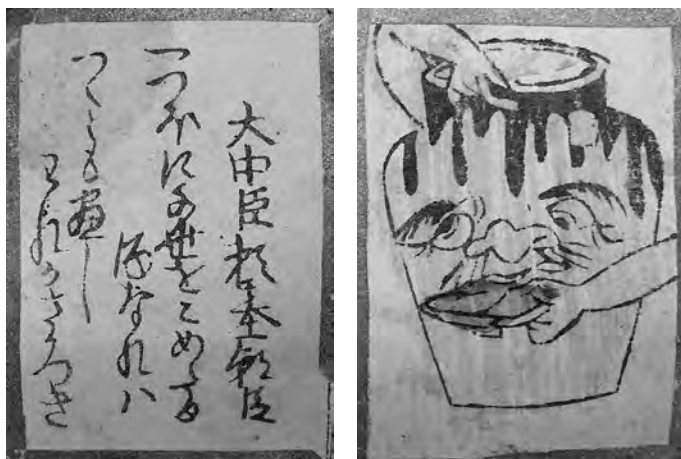
酒壺…酒を入れてたくわえる壺。  
鑑賞

【通釈】一壺に「幾千年先まで繁栄せよ」という験を備えた酒なので、私の盃はいくら注がれても尽きることはあるまいよ。

絵札に描かれた酒壺は、壺に手が生え、側面に顔がある。壺の蓋を盃にして酒壺自らが自身に蓄えられた酒を飲んでいく様子である。読み札の「つぐとも盡じ」というのは酒壺が「蓄える」と「呑む」の両方を行っていることによる。

通釈はあくまで暫定的なものであり、本歌と読み札に共通の「千世をこむ」という表現は、本歌に則って訳したが、「かるた」という事を考えると少し硬い様にも思われる。「千世をこむ」というのがここでは量を示しており、千年先まで飲み続けても減らない意を示しているとも考えられる。最も壺自身が飲んでいくから、千年先までも減らないだろう。

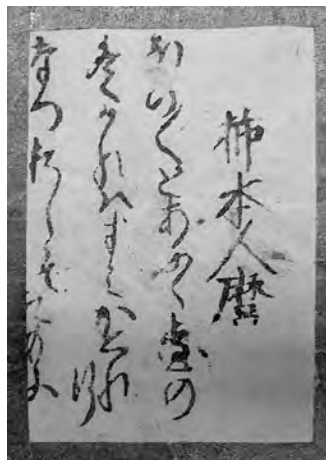
村上海賊の酒器には「水軍徳利」といわれるものが存在する。盃には穴が開いており、それに注ぐと漏れ出すため、酒を素早くどんどん飲まなければならないという。絵札の酒壺がどんどん飲むような様子はこのような所から影響を受けているのだろうか。



翻刻…一つほに千世をこめたる酒なればつくとも盡しわれかさかつき

本歌…ひとふしに千世をこめたる杖なればつくともつきじ君が齢は〔拾遺和歌集〕二七六

3 團(うちわ)―柿本人麻呂



團(うちわ) .. あおいで風を起こす道具。竹の骨に紙や絹布を張って作られる。円形のものが多い。

鑑賞

【通釈】ほのかに扇ぐように揺れている団扇(團)が、冬の寂しい景色の中、ひっそり潜んでしまった夏を恋しく思っているのだよ。

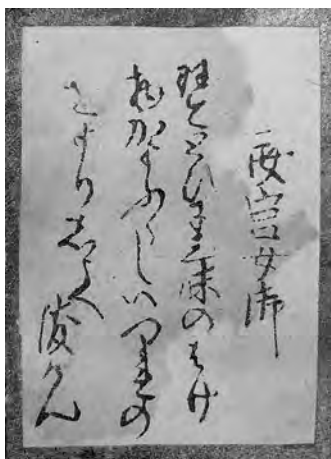
舌を出し、下の方を見て、人を馬鹿にしたような顔をしている。人の手から逃げ出し挑発しているのだろうか。過ぎ行く夏を恋しく思うという和歌の内容にはそぐわないように思われる。

「かくれ行」を掛詞的に読むこともでき、この言葉に団扇の「隠れる」と夏の「隠れ行く」二つの意味が潜んでいるとも思われる。

団扇からひもが伸び、その先に肌色の何かがついている。飾りなのか、手のようにも見える。

翻刻 .. ほの／＼とあふく團の冬かれはずみかくれ行  
なつをしそおもふ

本歌 .. ほのぼのと明石の浦の朝ぎりに島がくれ行舟  
をしぞ思ふ 『古今和歌集』四〇九



翻刻…琴とひに三味のはげ物かよふらしいつれのを  
よりしらへ染けん

本歌…琴のねに峯の松風かよふらしいづれの尾より  
しらべそめけむ〔『拾遺和歌集』四五一〕

三味の化け物…三味線は日本の代表的な弦楽器で三本の弦を撥ではじいて演奏する。胴には犬や猫のなめし皮が張られている。琉球の蛇皮線が大阪の堺に持ち込まれたとき琵琶法師によって改良された形だという。

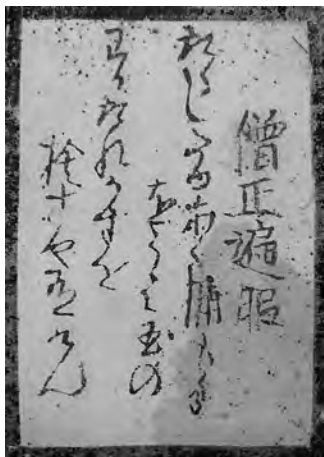
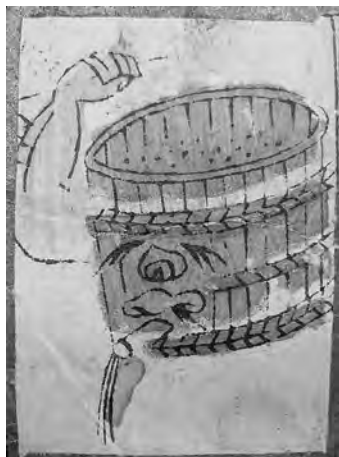
### 鑑賞

【通釈】琴を訪ねて、三味線の化け物が協奏しているらしい。どの弦から奏で始めたのでしょうか。

本歌では「琴」と「峯の松風」が詠まれている。しかし、当該札では「三味の化物(三味線)」が詠まれ、本歌で出てきた琴は三味線と協奏する楽器として出てきており、本歌を意識した弦楽器同士の対比が面白い。三味線の化物が「琴とひに」と「琴」を訪ねるわけだから、琴の化物の存在もこの歌からは想起される。本歌のモチーフの一つである「琴」がこのような形で出てくる所を踏まえ、本歌を知ったうえで遊ぶことの面白さがよく表れている。絵札の三味線は付喪神で、胴から手を生やし、撥を持っている。歌の中の「かよふ」は「協奏する」と言う意味だが、琴を訪ねて三味線がそこへ「通つ」て、協奏しているという風にもとれそうであるが、「とひに」があるので解釈過剰だろうか。



5 灰汁桶―僧正遍照



灰汁桶…洗濯や染物に使う灰汁抜き用の桶のこと。中に灰と水を入れて用い、桶の下部についた栓から灰汁が滴るようになっていゝ。

鑑賞

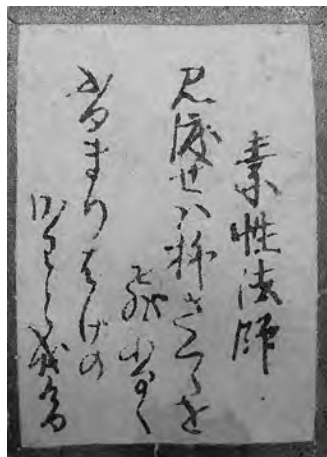
【通釈】灰汁を滴らせる灰汁桶も、うばたまのよう  
に黒くなつた垂槽を捨てないでおくことがあるう  
か。いや手をつ突つ込んででも捨てるだらう。

注ぎ口の部分が口になっていると考えられる。灰  
汁桶は本来、灰汁だけを排水するものだが、絵を見  
ると垂槽が大分溜まっているから、振り上げた手を  
桶の中に突つ込んで、手ずからとつて捨てようとし  
ているのである。

翻刻…たらしたるあく桶も手をうは玉のわかたれか  
すを捨すや有けん

本歌…たらちめはかかれとしてしもむばたまの我が黒  
髪をなでずやありけむ 『後撰和歌集』 一一四〇

6 古鞠—素性法師



翻刻…見渡せは柳さくらを飛あるくふるまりはけのかわと成ける

本歌…見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける (『古今和歌集』五六)

古鞠…皮で作った蹴鞠。球体で、蹴ったり投げたりして遊ぶ道具。

鑑賞

【通釈】見渡してみると、

「1古鞠が柳や桜の木々の間をあちこち動き、(あちこち行くので) その(化け物としての) 素性はわからない」

「2柳や桜が(風で) 飛び交い古鞠の(化け物としての) 素性を隠している」

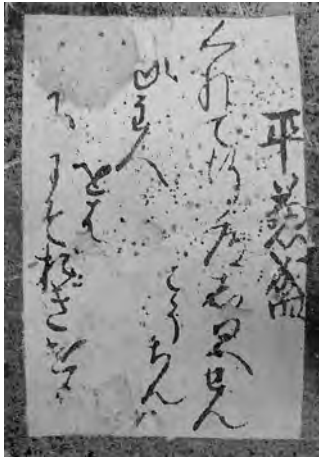
通釈として、ここでは二通り示した。一つは古鞠が化け物(付喪神)と化してあちこちに動き回る様子、もう一つは古鞠の周辺を桜や柳の葉が舞い散る様子と捉えている。いずれもそれが原因で古鞠の化け物としての素性が隠されている、というような解釈をしている。

「皮」で出来ている鞠と化けの「皮」とがかけられているか。化けの皮は、素性・本当の姿を隠す偽りの姿の事を指して使われる。古鞠「化け」と「化け」の皮とはどちらにも掛けられているか。また、古鞠及び桜や柳が動き回ること、「川」に見立てているとの解釈も考えられる。

貴族の遊びとしての印象が強い蹴鞠だが、武家社

会・一般にも親しまれるようになっていったことから、身近な遊具が年月を経て付喪神化していったと考えられる。

## 7 提灯—平兼盛



翻刻…くれて行道しるへせんでうちんは我〇へをは下にそおきける

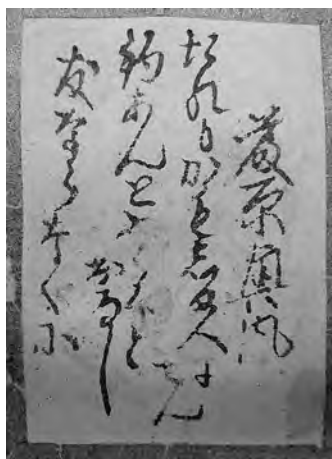
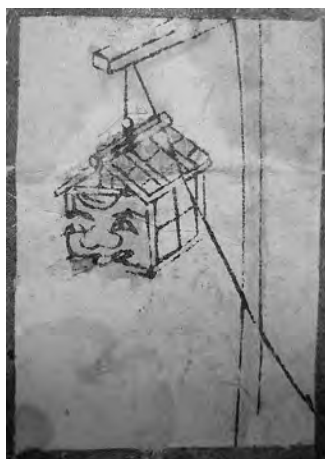
本歌…暮れてゆく秋の形見におくものは我が元結の霜にぞありける(『拾遺和歌集』二二四)

提灯…提灯は、蠟燭を灯すための道具で、木(竹)枠に紙を貼ることで風を防ぐ。夜間の携帯用にも、吊り下げて目印としても使われた。

### 鑑賞

【通釈】日が暮れていき道しるべの提灯は……。

日が暮れて「いく」事と、「行く」道とが掛けられているか。日の暮れる時間、黄昏時は周りがはつきり見えず、人の見分けもつかない(語源としては、「誰そ彼」からきている)ような時間である。昼と夜の境目であり、化け物の活動が活発になるとされる夜へ向かう頃であることから、化け物が活動を始める・化け物達との境界が曖昧になるような時間というように考えられることも。そんな黄昏時に、提灯一つの灯りを頼りに帰路につく心細さや焦り、恐怖心が読み取れるようである。提灯の紙の面に目や眉、鼻が付いており、目や眉は笑うように垂れ下がっている。



釣行灯…商家の店内や入口、また台所などに天井や梁からつり下げた行灯で、竹で大きく輪を作り、菅筥のように縦に骨を組んで紙を張ったもの。八間、八方ともいう。

鑑賞

【通釈】だれもかれも知己としようぞ……友にはなれないのに。

翻刻に傍記した読みの複数案を以下にまとめておく。

- ・「う」（ふ）…ここは「う」で「右」を字母としたもので「あんとう」。14行燈も同様。
- ・○（く）、○（ほ）…この部分はかすれているため判明でない。
- ・「出」（な／お）…「出／な／お」ともに他の読み札における用例はおよそ二通り。「出／お」はいずれも出字の形と近似。
- ・る（な）…他の読み札の用例からいずれであるともしえる。

翻刻…たれもかもしる人にせん釣あんとう<sup>ふくほ</sup>と出<sup>な／お</sup>るく友ならなくに

本歌…たれをかもしる人にせむ高砂の松もむかしのともならなくに（『古今和歌集』九〇九）

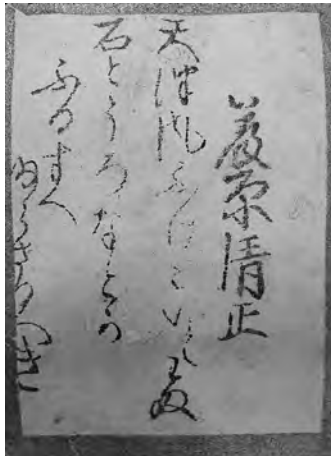
一例のみ「く」のように屈曲したものを確認。「し」は直線的なものと湾曲したものを確認。「し」であるとする方が自然か。

読み札冒頭は本歌と異なり「たれもかも」で「だれもかれも」となる。本歌が「だれを友としようか」と思い悩む歌であるのに対し、読み札では判読できない所もあるがおよそ「だれでも彼でも、釣行灯も本来は友にはならないが、友にでもしてしまえ」という旨だろうか。

絵札の釣行灯は、丁形の支柱にひものようなものでぶら下げられている。小さな家のような形をしており、妻側には人面が描かれている。目は半月型をしており、ニヤニヤしながら舌を出しているような気味の悪い絵でもある。

或いは、出ている舌を、吹き出した火と見る見方もある。この部分については読み札の翻刻を含め、解釈が揺れているため、絵札の見方も読み札とあわせて今後も検討していく必要がある。

## 9 石灯笼—藤原清正



翻刻…天津風ふけといとわぬ石とうろなとかふるす  
へ帰らざるへき

本歌…あまつ風ふけひの浦にゐる鶴のなか雲居に  
帰らざるへき『拾遺和歌集』一三三

石灯笼…石造りの灯笼。用途によつてさまざまな種類がある。

### 鑑賞

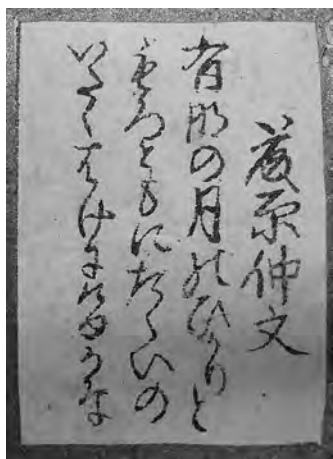
【通釈】天津風が吹いてもいやがらない石灯笼がどうして古巢に帰らないことなどあるうか。

石灯笼に目と手がついていて、赤い舌が出ている。目は本来穴が開いている箇所だと思われる。比較的かわいらしい顔をしている。「古巢」がどこなのかわからないが、二通りの解釈を考えた。

①古巢へ帰るとは土に還ることを意味していて、天津風が吹いても吹き飛ばされない頑丈な石灯笼でも、いずれは土に還るのだという歌。

②天津風のような強い風が吹いてもいやがらない石灯笼が「何故古巢へ帰らないのか、早く帰りなさい」と言っている。古巢は家を指しており、石灯笼が人に帰宅をうながしている歌。表情がやわらかいこと、手を振るようなポーズをしていることから考えた。

## 10 たらい―藤原仲文



翻刻…有明の月のひかりともるともにたらいのいたくばけにけるかな

本歌…有明の月のひかりを待つほどに我が世のいたくふけにけるかな『拾遺和歌集』四三二六

たらい…顔を洗ったり、口を漱いだり、洗濯したりと用途は様々であるが、日本では主に平安時代あたりから用いられ始める。また信仰の類では清めの水を入れて用いることもあり、大嘗祭では天皇が神前で口を漱いだり、手を洗ったりする際に用いるものがある。

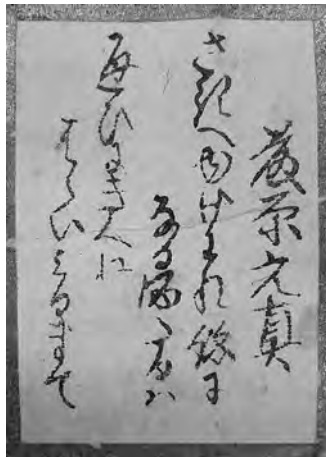
### 鑑賞

【通釈】有明の月の出とともに、その光を浴びて、たらいがなんとも上手に化けたものだ。

たらいの底にニヤけた顔が描かれている。手足はない。月の光に顔が照らされているということが詠まれている。

夜更けにたらいが異形へと姿を変えることをあらわしている。世界的にも月は不思議な力を持つているためその月の光にあてられて、ただのたらいが化物のようになってしまった事が分かる。

## 11 酒たる―藤原元真



翻刻…さきへゆけわれ後になる酒たるは通ひにきへ  
ねはらいみるまで

本歌…咲きにけりわがやまざとのうのはなはかきね  
にきえぬ雪とみるまで 『元真集』 八九

酒たる…酒たるはお酒を入れて保存しておく樽で、持ち手と蓋があり運ぶ際にも便利。杉や檜といった木材で作られた。

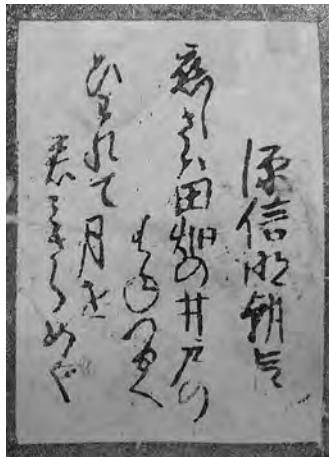
鑑賞

【通釈】先に行って私が後に…支払いが確認できるまで通い帳からは消えない。

絵札では、樽の側面に眉、鼻、目が描かれており、本（通い帳）を見ている。口が赤く強調されている。仲間（この場合樽の化け物の仲間か）に先に行くように言って、気前よく会計を自分が持ったものの、奢ることが重なってしまい、さながら借金の返済に困ってしまったような表情にも見える。

あるいは、酒を売っているのは酒樽自身で、自身が酒を売った相手に対して支払いを要求しているのだろうか。お金に出納に厳しい商人らしい顔つきにもとれる。

12 はねつるべー源信明朝臣



翻刻…恋しさは田畑の井戸のはねつるへひわれて月を君みさらめや

本歌…こひしさは同じ心にあらずともこよひの月をきみみざらめや（『拾遺和歌集』七八七）



はねつるべ…水を汲む道具で、支点でささえられた横木の一方に重し、一方に釣瓶を取りつけて、重しの助けによつてはね上げる。桔槔。『国際日本文化研究センター 怪異・妖怪伝承データベース』によると、焼け跡の家から夜な夜な声がして、その正体が風呂の水を汲む釣瓶だったという釣瓶が怪異になるケースが報告されている。

### 鑑賞

【通釈】「恋しい」と田畑にある井戸のはねつるべがきつと思っているのだろう。干割れてしまった君（はねつるべ）はきつとその高みから月をみているのだろうか。

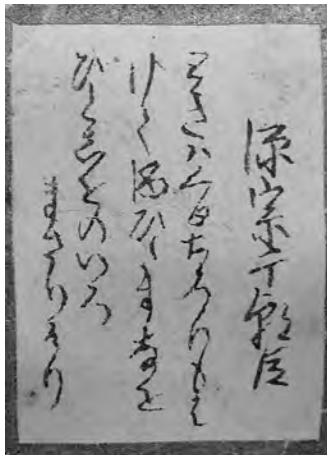
絵札には丁寧にも井戸とはねつるべの両方が描かれている。絵札の中のはねつるべはどことなく悲しそうに顔をしているようにも見える。

本歌では詠者の思い人への恋しさの様子がいっそう強調され、心は一つ、同じでなくともきつと同じ月を見ていてくれよと言うような歌だが、ここでは自身の役割をこなせないはねつるべがかつての仕事を想起して「恋しい」と思っているのだろう。水を汲むのが仕事のはねつるべはその仕事をすることがなくなつて久しく、遂に乾いて割れてしまっている

ようである。

本来の役割をこなせないはねつるべは、当然井戸の上で高くはねあげられており、その高さから空の、或いは井戸の中の月をきつと見ているのだろう。

### 13 ちろりー源宗千朝臣



翻刻…ときはくるちろりもはけて酒ひたすなをひとしをのいるまさりけり

本歌…ときはなる松のみどりも春来れば今ひとしほの色まさりけり(『古今和歌集』二二四)

ちろり…酒を爛するための道具で、銀や銅など熱をよく伝える金属で作られている。湯の中に入れることで、酒を温める。持ち手と注ぎ口があって、酒が注ぎやすくなっている。

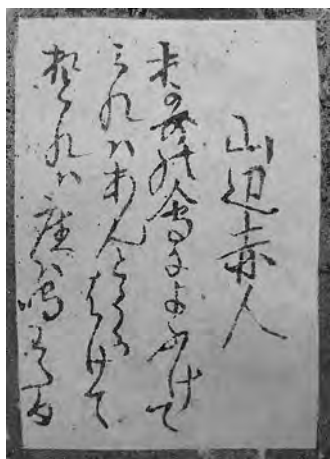
### 鑑賞

【通釈】時が来るとちろりも化けて、酒でぬれて尚いっそう顔色が出来上がって(赤くなって)いることだ。

酒を温めるための酒器であり、ここでの「色」とは酒気を帯びることで顔色が赤くなっていることを指していると考えられる。

ちろりの側面に目が付いており、前掛けのようなものを付けた身体が生えている。この、生えている身体が薄く色付いている。自分の頭部の持ち手部分に手を添え腰かけているようなポーズをとり、笑って細められた目元からも、陽気でいい気分になっているように見える。

## 14 行燈―山部赤人



翻刻…和哥の会によふけてみればあんとうかはけておとれは座は鳴わたる

本歌…若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る(『続古今和歌集』一六三四)

行燈…昔の照明用具。木、竹、金属製のわくに紙を張り、なかに油皿をおいて火をともし。元は提げて歩いたが、室内に置くようになった。様々な種類がある。

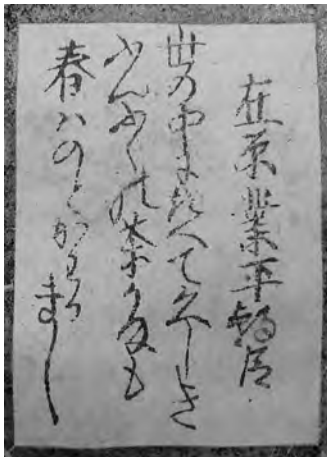
### 鑑賞

【通釈】和歌の会で夜が更けて行燈が化けて踊ると座には悲鳴が響き渡る。

行燈に手足が生え、顔がついている。飛び出た引き出しに赤く色が付けられていて、舌のように描かれている。下を向いた拍子に飛び出してしまったのだろうか。右手を少し上げた姿は、脅かそうとしているというより少し声をかけただけのように見える。右足が右肘から生えているように見えるが、線が薄くなってしまっているだけでしょうか。行燈から生えている。

### 名のある化物

#### 15 分福茶釜—在原業平朝臣



翻刻…世の中にたへて久しきふんふくの茶かまも春はのとかわかまし

本歌…世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのど

けからまし(『古今和歌集』五三)

分福茶釜…汲んでも汲んでも中身が無くならない茶釜で、持ち主か茶釜自体が化け狸だと語られる。群馬県館林市の茂林寺の話が有名で、ここでは狸が化けた釜ではなく、古狸が化けた僧が愛用していた釜とされている。

### 鑑賞

【通釈】世の中に長い間絶えて使われていなかった分福茶釜も、春になるとのどが渇くのだろう。

腕が生えた茶釜で、分福茶釜というには狸の要素がほとんど見られない。液体がなみなみ入っているように見えるが、汲んでもなくならないということ表現しているのだろうか。狸の要素が見られないのは、上手く化けているという事を表しているのか。「たへて」の部分を「堪へて」と捉えると、長い間化けたまま堪えていた分福茶釜がのどの渇きに耐えられずに、腕を出して沸かした湯を飲もうとしていると考えられる。

## 16 ろくろ首―伊勢



翻刻…身は床にふしてまちみむろくろくひ○○○○  
くひのあらしとおもへは

本歌…みわの山いかに待ち見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば(『古今和歌集』七八〇)

ろくろ首…首が伸びたり飛んだりする妖怪。主として成人したばかりの娘や女中で、心の緩んだときや、食や水を求めるときに伸びるのだとか、離魂病の一種だなどといわれている。伸びる首をなげろくろ首というのかは明確でない。夜に活動する。

### 鑑賞

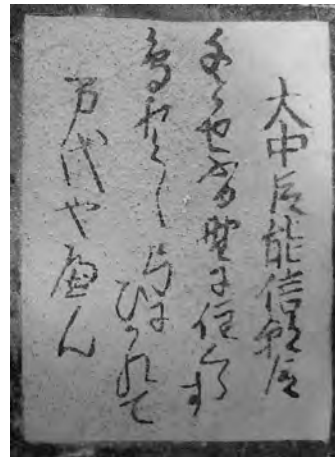
【通釈】身は床に伏せ、待つろくろ首…首がないと思ふので。

床に伏せた身体から首が伸びている。人間を驚かそうとしているわりにはすでに首を伸ばしてしまっており、正体を隠して人間を待っているとは考えにくい。破損個所には本歌と同じ「たづぬる」が入り、ろくろ首同士の恋愛を詠んだ歌になるのではないか。その場合、「ないと思ふので」となっているので、訪ねてくる首（ろくろ首）がないという事か。

あるいは、「くはないと思ふので」というのは、首を長くして待つているろくろ首にも、もうこれ以上伸びる首がないという事だろうか。

「ないと思ふので」に関して、二つの解釈が両立するなら「身は床に伏せ、待つろくろ首。訪ねてくる首がないので、これ以上伸ばす首もない」といった通釈も考えられる。

### 17 以津真天（いつまで）——大中臣能信朝臣



翻刻…ちとせふる野に住くらす鳥やとく弓にひかれて万代よやへん

本歌…ちとせまてかぎれるまつもけふよりはきみにひかれてよるづよやへん（『拾遺和歌集』一三二）  
以津真天…鳥の妖怪。鬼のような顔、蛇の胴、差し渡しが二丈に及ぶ巨大な翼を持つ怪鳥。「いつまで、いつまで」と人間が叫ぶような鳴き声をあげる。『太平記』によると、疫病が蔓延した年にこの鳥が毎晩鳴き声をあげていたことを不気味に思い、弓の名手に退治させたという。

### 鑑賞

【通釈】千年も野に住む鳥よはやく弓にひかれて万

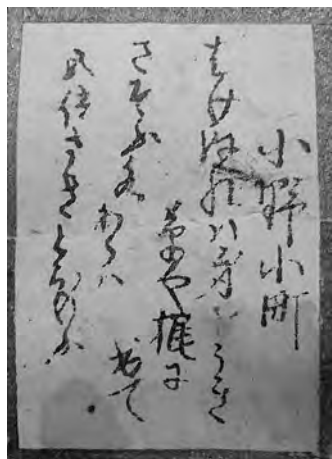
年の命を保つでしょう。

歌から以津真天ではないかと考える。千年も野に住むということから、鳥の妖怪であることは間違いないと考える。さらに「ちとせ」「万代」という永い時を示す言葉が、鳴き声である「いつまで」に通じ、太平記においては弓で退治されたという点から、当研究会ではこの読み札は以津真天に関するかと推定した。但し、これに対応すると見られる絵札は存在せず、歌の正しい意味や状況は不明である。「以津真天」という名も、江戸時代の画家・鳥山石燕の『今昔図画続百鬼』にて太平記の記述をもとに付けられた名前である。

あるいは、「千年も野に住むという鳥も、弓にひかれて万年の命を保つことになるであろう」という意味で、弓で射殺されるのではなく、呪力のある梓弓の力で化け物「以津真天」（いつまで）の寿命が延びることか。

なお、当項目「以津真天」は、当研究会で暫定的に特定した化け物である。この点については今後も検討が必要である。

## 18 五位さきー小野小町



翻刻…はけぬれば身をうき草や梶に出てさそふ水あ  
らは五位さきとおもふ

本歌…わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水  
あらばいなんとぞ思ふ（『古今和歌集』九三八）

19 うわばみ―紀貫之

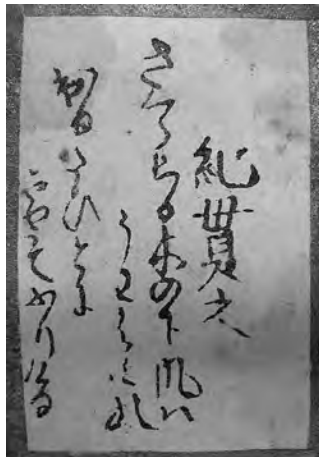
五位さぎ…樹齡の長い大木の下を夜遅くに通つたりした際に、木の上から「どこに行く」という風に声が聞こえたり、怒鳴られたりするという。一方で漁師が夕刻に見ることがある光の正体だとも言われている。サギが火の玉になるともいわれている。その名は、醍醐天皇の御代、勅命に素直に従ったので、五位を賜ったことに由来するとされている。

鑑賞

【通釈】化けると、その身をうき草の漂う辺りや船の舵程の後方に出して、誘ひ招くものがあれば、それは五位さぎだと思ふのである。

絵札のゴイサギは明らかに鳥の形をしており、水辺にいる様子が描かれている。ゴイサギの伝承でも、大木の木の上にいる場合と水辺で漁師らに目撃される場合があるからこれはきつと後者だろう。

読み札では、化けて出た五位さぎは、漁師などの目撃者を惑わし、誘い出そうとしている。一方で目撃者たちはそれを見て「ああ、五位さぎがいるんだな」と思っている。絵札の五位さぎは火を噴いており、五位さぎ自体が光の怪異の正体とされているから、目撃者たちが見ているのは五位さぎの姿ではなく、噴いて出た火なのだろう。



翻刻…さくらちる木の下風はうわはみの出るたひこ  
とに雪そふりける

本歌…桜ちる木のした風はさむからで空にしられぬ  
雪ぞふりける (『拾遺和歌集』六四)

うわばみ…小さいものでも約九〜一二メートル、大きいものだと一八メートルにも達するという大蛇。鹿を食らい、なかなか死なず、巨軀をうねり、這って移動する。昔話「たのきゅう」には自らの軽口と勘違いで弱点をばらしてしまい住処をおわれる滑稽な姿が描かれる。「うわばみ」を「酒飲み」として表現することもあり、桜の下でどんちゃん騒ぎをする酒飲みみらであるかともうかがえる。

### 鑑賞

【通釈】桜が散る木の下に吹く風はうわばみで、うわばみが出るたびに雪が降っているなあ。

絵札のうわばみは、蛇というよりは龍に近い見た目をしている。その上部から桜が舞い散っているのが見える。「ゆきぞふりける」は本歌通りに桜を雪に見立て花びらが舞い散っている様子を詠んでいる。

前述のようにうわばみは非常に巨大な蛇で全長が長いだけでなく体の周囲も一メートル以上もある。ここでは「うわばみ」が「風」という比喻で表されており、恐らくこの桜は、うわばみが動いた揺れやその巨軀が掠った事によって桜の木も揺れ、桜が散ったのだろう。「出るたびごと」とはそのよう

なうわばみの邪魔くさいほどに巨大な様子を表している。

20 かわ太郎―紀友則

かわうそ―源順



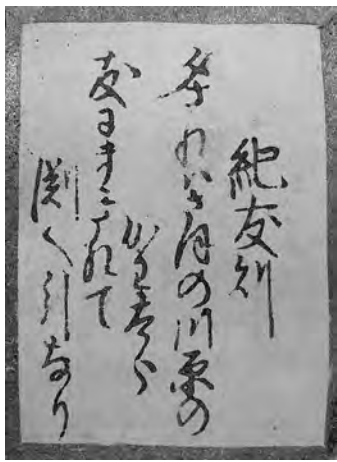
甲



乙



そうだ。



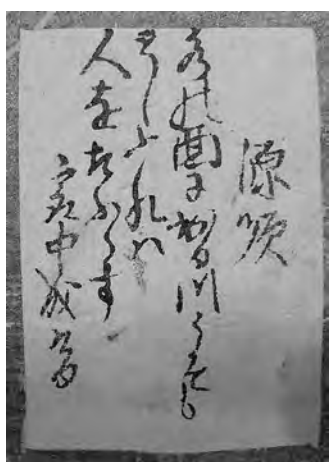
かわ太郎

翻刻…夕されはさほの川原のかわ太郎友にまきれて  
淵へ引なり

本歌…ゆふされればさほの川原のかはぎりにもまど  
はせるちどりなくなり 『拾遺和歌集』 二三八)

かわ太郎…河童の河太郎。水中に棲み、人や牛馬を  
害するとされる存在。中世く近世初期においては、  
河童は水中の猿とイメージされていた。民間伝承に  
おける河童は、子供を溺れさせる・牛や馬を水中に  
引き込む・物に化けて人を水に誘うなど人間に害を  
なす一方で、性質は悪戯好きで愛嬌があるとされて  
いた。

【通釈】夕方になると佐保川にいるかわ太郎が友人  
にまじって淵へ引いて（溺れさせようとして）いる



かわうそ

翻刻…水の出る川うそもしふれば人をたふら  
す最中成ける

本歌…池の面に照る月なみを数ふれば今宵ぞ秋のも  
なかなりける 『拾遺和歌集』 一七一)

かわうそ…河童のモデルともいわれ、河童の一種と  
して妖怪の仲間とされていた。とても利口な動物で、  
年を取ると化ける事が出来ると言われていた。日本  
の昔話や伝説では、川獺は狐や狸と同様に美しい女  
や男に化け、人を騙す動物として登場する。  
【通釈】水の表に顔を出す川獺も年を経ると人をた  
ぶらかす真つ盛りとなるのだなあ。

鑑賞

読み札は、それぞれ、絵札甲・乙のどちらかに対

応すると考えられる。しかし、河童も川獺も同じ水辺の生き物であり、『下学集』に「獺老いて河童と成る」とあるように二つは似ていて見分けが難しい。

本研究会では、当該資料の欠損を補う遊び方の一つとして、読み札に対して複数の絵札の一致を認める可能性についても考えた。かるたの絵札に文字が書かれていないことは様々な解釈を可能とし、札同士的一致を即興的に遊ぶ側の判断に委ねることもできるのである。

本研究会で、絵札と読み札のそれぞれの解釈から河童と川獺はどちらの絵札かについての考察を以下に記す。

#### 〈歌からの考察〉

「夕されはさほの川原のかわ太郎友にまきれて渕へ引なり」

・友に紛れて一緒に遊んでおり、渕へ引くタイミングを窺っているとすれば、人に化けている絵札甲が近いと考えられる。

・渕が水が深くなっているところを指すため、深いところに潜んで引くタイミングを窺っているとすれば、絵札乙が近いと考えられる。

「水の面に出る川うそもとしふれば人をたふらす最

中成ける」

・人に化けて人をだましている最中を詠んでいるとするならば、絵札甲が近いと考えられる。

・水の表に顔を出している川獺を見て「この川獺も年を経ると人を化かすようになる」と詠んでいるとするならば、絵札乙が近いと考えられる。

#### 〈絵からの考察〉

・『怪異・妖怪画像データベース』には笠をかぶって服を着た川獺の絵が出てくる。絵札丙も服を着ている点は同じである。しかし、絵札甲は笠をかぶっていない。

・『古今百物語評判 巻四 第二河太郎丁初が物語の事』には河童の絵として現代の川獺のイメージに近い形で描かれている。絵札乙と比べてみると、体つきや簡易化されている手の形が似ているように見える。また絵札乙の口の周りに髭のようなものがある点も似ている。

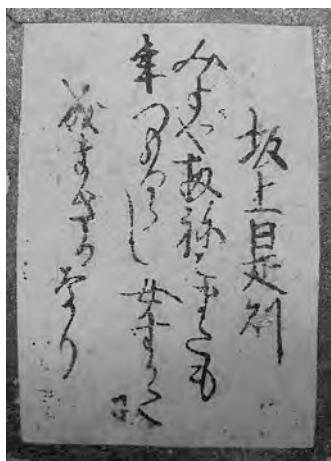
・一八世紀頃の河童は、江戸では猿イメージとは異なり亀や蛙がモデルのように描かれ、西国では猿をイメージしたように描かれていた。猿に近く書かれているのは絵札甲である。絵師が西国の人であったならば、河童について描かれているのは絵

札甲が近いと考えられる。

・ 絵札甲に関して広島県に伝わる猿猴という化け物と似ている。猿猴は河童の類で毛むくじやらで猿に似ているとされる化け物である。河童と書きながら猿猴を想像していたとすれば、絵札甲が河童の絵札であると考えられる。

絵札乙に関して岡山県に伝わるハンザキ大明神と近い形の絵である。ハンザキとは、オオサンショウオのことを指す。前掲二枚の絵札甲・乙は、読み札から推測する限り河童か川獺だろう。オオサンショウオも河童も川獺も水辺の生き物であるため絵を描く際に影響があつたのかもしれない。

## 21 猫又―坂上是則



翻刻…みよや扱ねこまたも年つもるらし女すかたに  
成まさるなり

本歌…み吉野の山の白雪つもるらし古里さむくなり  
まさるなり (『古今和歌集』三二五)

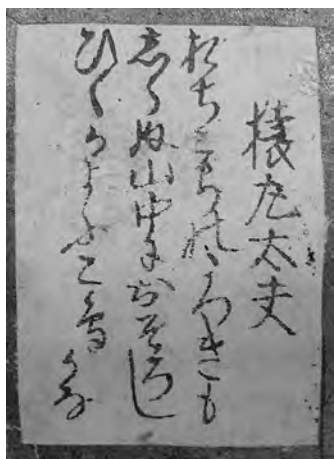
猫又…老いた猫の化け物で、尾が二又に分かれ、化ける。人に害をなすこともある。

鑑賞

【通釈】猫又も年を重ねるとますます女性のような姿になるのだ。

ここでの「女性のような姿」というのは、人間の女性のように着飾るようになる、という意味合いか。絵札では煙管を咥え、女物の着物を身にまといつてしなだれるように座っている。

## 22 狒狒—猿丸太夫



翻刻…おちこちのたつきもしらぬ山中におそろし  
ひゝかよふこ鳥かな

本歌…をちこちのたつきもしらぬ山中におぼつかな  
くもよぶこどりかな『古今和歌集』二一九

狒々…全身毛で覆われた、猿のような容姿の妖怪。  
獰猛な性格で、人を喰うとされている。

### 鑑賞

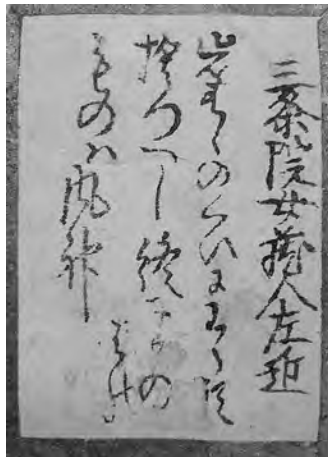
【通釈】あちらもこちらも見当もつかない山の中に居るのは、恐ろしい狒々かそれとも猿か（恐ろしい狒々の声が聞こえた気がする）。

「呼子鳥」はかつこうや時鳥の鳴く声が、子を呼ぶ声に聞こえたことから呼子鳥と言われた。古くは猿を指す言葉でもあったとされ、ここでは猿と似た容姿の狒々と関連付けられると考える。

本歌が山中で呼子鳥の声を聞き心細さを覚えていることを踏まえ、ここでも山中で何かの声が聞こえて「もしかすると狒々の声かもしれない」と不安に駆られているのでは、と考えることも出来る。

絵札の狒々は、口角を上げにやりと笑うような表情で、何かを追いかけているかのような、走っているようなポーズをとっている。

### 23 風神—三条院女蔵人左近



翻刻…岩は、のくいに至らず捨つへし終に○のみのものは風神

本歌…岩橋の夜の契も絶えぬべし明るるわびしき葛木の神（『拾遺和歌集』一一〇一一）

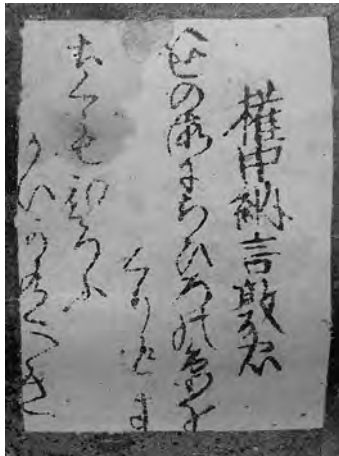
風神…風をつかさどる神。風神は神であるが、暴風を起こしたり風邪を運んできたりと妖怪に近い存在としてとらえることができるため、化け物三十六歌仙に含まれたのではないだろうか。

### 鑑賞

角が生えていて、袴のような服を着ている。右手を挙げて何か言葉を発しているように見える。脅かすというよりは気さくに挨拶しているように見える。

風神は一般的に裸形で風袋をかついだ姿で想像されることが多い。今回の絵札に書かれた風神は、一般的にイメージされる風神と異なっており一目で風神だと認識するのは難しい。今回は他の絵札との組み合わせをふまえて、当該絵札が風神についての絵であると考えた。

## 24 土蜘蛛—藤原敦忠（権中納言敦忠）



翻刻…いせの海にちひろの糸をくり返す土くもひろふかいかへき

本歌…伊勢の海のちひろの浜にひろふとも今は何てふかひかあるべき『後撰和歌集』九二七

土蜘蛛…巨大な蜘蛛の姿の妖怪。

土蜘蛛は上古の日本においてヤマト王権や天皇に恭順しなかつた土豪たちを示す名称であったが、近世以降物語や戯曲などに取り上げられ妖怪として定着していった。有名な話として源頼光の土蜘蛛退治が挙げられる。

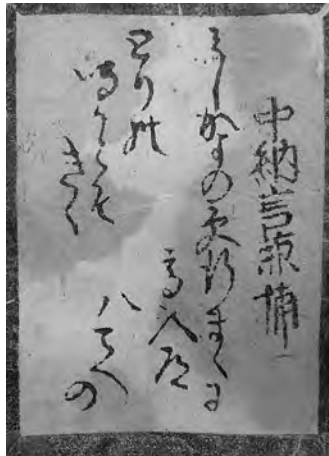
鑑賞

【通釈】伊勢の海に、たくさんの数を拾うちひろの糸を出したりしているけれども、その糸で土蜘蛛が拾う貝などあるのだろうか。

蜘蛛の巣の上に土蜘蛛が描かれている。蜘蛛の頭部は丸で描かれていて、背中には毛が生えているか模様が見える。体は蜘蛛で顔は人に近づけて描かれていると考える。口元あたりで何かやっているようだがかすれて見えない。糸を吐いているようにも見えるが、あるいは貝を探しているか。

「ちひろ」とは「千尋」で広大な様を表すが、「千(ち)拾(ひろ)」で、「千にのぼるほどたくさんの数を拾う」という事だと考えられる。

25 高入道―藤原兼輔(中納言兼輔)



翻刻…みしかよの更行まゝに高入道八こえのとり  
鳴かんとそきく

本歌…短夜のふけゆくままに高砂の峰の松風吹くか  
とぞきく『後撰和歌集』一六七)

高入道…背の高い坊主頭の化け物のこと。主に四国や近畿地方に伝わる妖怪。

鑑賞

【通釈】短い夜が更けてゆくにつれて八声の鳥が鳴いているのかと聞いてしまいますよ。

首を伸ばした高入道が下の方を見ている。口元や目元が笑っているように見える。

『日本国語大辞典』によると「八声の鳥」は暁に何度も鳴く鶏。「八声の鳥」は昔話「時鳥（ほととぎす）」と兄弟」で、誤解から弟を殺してしまった兄が「弟恋し」と泣き叫ぶうちに時鳥に変身し、その後は「八千八声」を鳴くまで一日が終わらない話とも重なる。時鳥は人里離れた山奥で鳴く鳥として知られ、和歌においてはあの世とこの世を結ぶ鳥としても詠まれている。

26 唐傘―藤原高光



翻刻…かくはかり破しかさもよの中を足一本てとひあるくかな

本歌…かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな (『拾遺和歌集』四三三)



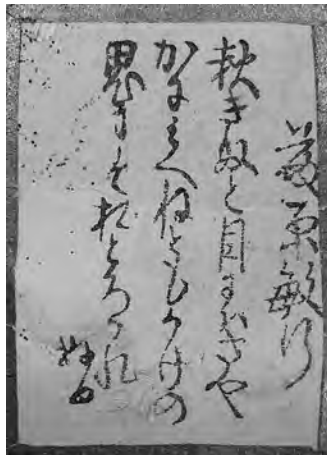
唐傘…竹の細い骨に紙を張り、開閉できる作りになっ  
ていて、雨、雪または炎天の時にさす。一本足、  
唐傘小僧などと呼ばれる妖怪が有名。

鑑賞

【通釈】これほどまでに破れている傘も世の中を一本  
本足で飛び歩いているなあ。

唐傘の化物というと、一つ目一本足のものを思い  
浮かべるが、これは一本足ではあるものの、しっか  
りと目鼻口が揃った顔がついている。かすれてし  
まって見えにくいのが、口のあたりから赤い舌のよう  
なものが出ている。他の絵札と比べて顔が険しいよ  
うに見えるが、足一本で飛び回り疲れているのだろ  
うか。

27 鬼―藤原敏行



翻刻…秋きぬと目にはさやかにみへねともかけの鬼  
にそおとろかれぬる

本歌…秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音に  
ぞおどろかれぬる 『古今和歌集』一六九

かげの鬼（鬼）…日本では天狗や河童と並んで三大妖怪として数えられる。鬼とはもともとは、目に見えない死者の魂、もののけ、幽霊、ひいては荒神や神霊を示すものであった。各地伝承には、山の神などが鬼の姿をとって信仰される例が散見される。それが後に、仏教や陰陽道と結びつくことで現在の姿に固定されたが、百鬼夜行の百鬼は「様々な形をした鬼」という意味で、本来は色々な形をとったり目に見えなかったりする。付喪神が鬼として悪事を働いたり、土蜘蛛や妖狐の魂魄が鬼として出現するなどして、化物の多くは鬼と非常に密接な関係にあった。

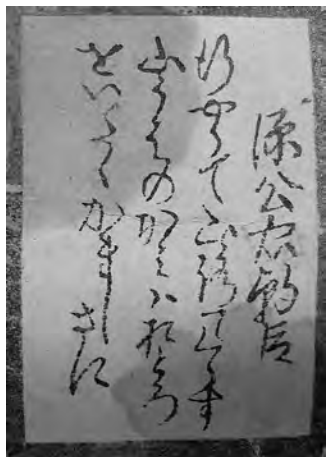
#### 鑑賞

【通釈】「秋が来たな」というのは目でははつきりと捉えることはできないけれども、影で見える鬼には、はっと気づいてしまった。

絵札の鬼は他の札の化け物と違い、細部が描かれておらず、身体のみで描かれている。読み札にある通り、これは「かげの鬼」である。

鬼は部屋の外に居り、月光によって内側から鬼の存在を確かめることが出来る。絵には直接書かれていない月光は、歌の「秋」の要素を入れ込んでいる。

本歌は、秋が来たというのは目で見てわかることではないが、秋の風の音というのはわかるので、秋の到来を感じるといえる歌。読み札では、「かげの鬼にぞおどろかれぬる」となっているが、ここでの鬼は本来見えないはずの鬼が描かれており、本歌での見えぬ秋の到来に対比して、見えないはずの鬼が影によって見えてしまった事を詠んでいるのだろう。



山姥…山奥に住む老婆の妖怪。長髪長身で鋭い目、口も耳まで裂けるような恐ろしい容貌で描かれることが多い。

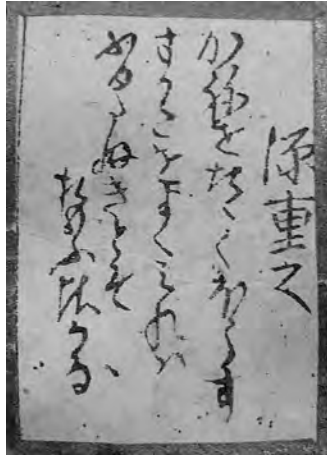
鑑賞

【通釈】行く山道の道中で暮らしている山姥の髪の毛は、騒がしいまでに乱れている。

絵札では左手には棒（杖）を持っており、右手は髪を持っている。腰まで伸びる髪の毛があちこちから覗き、髪の毛が乱れている様子がわかる。肩と腰回りには、葉っぱで作られた羽織のようなものを付けている。

翻刻…行やらて山路てくらす山うはのかみはおとろをいたくかましさに

本歌…ゆきやらで山路くらしつほととぎす今ひと声のきかまほしさに 『拾遺和歌集』 一〇六



翻刻…かねをたゞくほらすすかたをよくみればふる  
たぬきとそおもふ頃かな

本歌…かぜをいたみいはうつなみのおのれのみくだ  
けてものをおもふころかな 『詞花和歌集』(二二一)

古狸…狸の妖怪で、人をだましたり化けたりする。  
比喩表現としては、長い年月をかけ様々な経験を積  
み悪知恵のついでている人を指す。

鑑賞

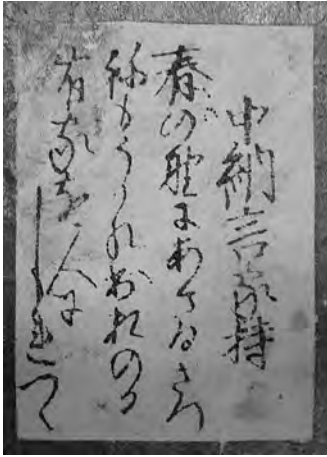
【通釈】鐘を叩いて(うつとりさせて・だまして)  
いる姿をよく見てみると古狸かと思うこの頃だ。

ここではよりずる賢い様子を表す為、単なる「狸」  
ではなく比喩表現としても用いられる「古狸」とし  
ているか。

笠を被り、縦縞模様の着物を身にまとい、左手に  
鐘、右手に槌を持っている。一見旅人のような出で  
立ちから、こうして鐘を鳴らしながらあちこちを  
回つては人をだましているのかと想像させる。

その他

30 狐—大伴家持（中納言家持）



翻刻…春の野にあさるきつねも浮かれ出おのか有家  
を人にしれつつ

本歌…春の野にあさるきぎしの妻恋ひに己があたり

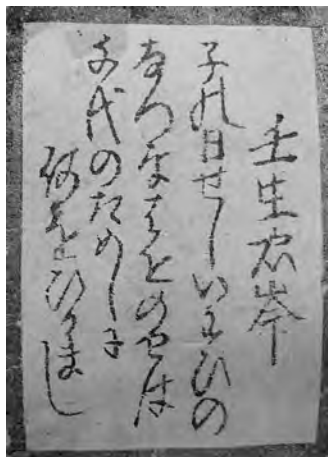
を人に知れつつ（『万葉集』一四四六）

狐…悪賢く、人をだましたり感かせたりすると言われ、ずる賢い人を指すときに用いられることがある。昔話では、狸と並んで人をだます動物・妖怪の代表格として描かれることが多い。

鑑賞

【通釈】春の野に餌をあさる狐も浮かれ出て自分の住処を人に知らせてしまっている。

大きな葉を頭にのせ、後ろを気にしながら忍び足で歩いているような描かれ方をしている。しかし、「おのが有家を人にしれつつ」とされている。ずる賢い狐も春の陽気には浮かれてしまつて失敗してしまふということだろうか。



蕪…アブラナ科アブラナ属の越年草。別名にナズナがある。春の七草として食べられる。

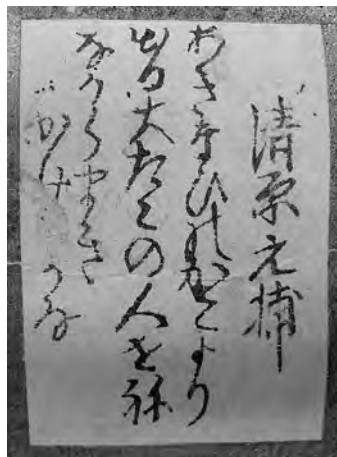
鑑賞

【通釈】子の日の祝いのなすなの葉をのせたならば、千代を祝うの恒例に、何を引いたらよいのだろうか。眼とまゆの上に口のようなものが描かれているように見える。眉はきりつとしていて下を睨みつけているように見える。

子日とは十二支の子にあたる日で、正月の最初の子の日をさすことが多く、野に出て小松を引き若菜を摘み、遊宴して千代を祝う行事。「祝いのなすな」の「葉」をのせることから、七草行事とも関連するか。このかるたを楽しむ時期としても正月にふさわしい一枚である。

翻刻…子の日せしいわひのなつなはをのせは千代のためしに何をひかまし

本歌…子の日する野へに小まつのなかりせは千代のためしに何をひかまし 『拾遺和歌集』二二二



翻刻…あきなひのかこより出る大たこの人をねなからまきかけ○かな

本歌…秋ののはぎのにしきをわがやどにしかなのねながらうつしてしかな『続詞花和歌集』一三〇

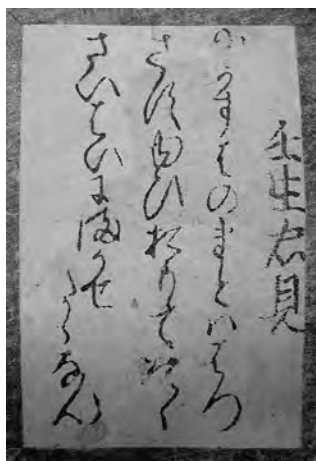
大蛸…大きな蛸。その大きさから、化け物として捉えられたか。

※瀬戸内海の大三島には、大蛸の伝承が残されている。じじ岩・ばば岩の主である大蛸が、そこで潮干狩りをしていたお浜という娘を嫁にしようとした。返事が出来ずに居ると毎晩暴風を起こし、最終的にお浜は大蛸に連れていかれ、嫁にされてしまう。

### 鑑賞

【通釈】商いの籠から出てきた大蛸の、人を……。

絵札では人よりも大きな蛸が、その足を人に巻き付けて（締め上げて？）いる様子が描かれている。巻きつかれている人は眉根を寄せて堪えるような苦しげな表情で、大蛸の方は目を吊り上げており、人間が大蛸を怒らせてしまった可能性が考えられる。また、そんな蛸が暴れて人間の手には負えないような状況であるとも見える。



翻刻…やかすはのまとははつさすゆひおもてたゝさ  
いはいにまかせたらなん

本歌…やかすともくさはもえなむかすがのはただ春  
の日にまかせたらなむ『新古今和歌集』七八

藁人形…藁を束ねて、人間の形にしたもの。おもちゃとして作られるほか、合戦時のおとり・目くらましや、呪いをかけるための道具としても使われる。

#### 鑑賞

「やかす」は「的を外さない」という点から「矢数」か。「ゆひおもて」は「結面」で藁人形の顔を指しているか。「弓面」という可能性も考えられる。「さはいはい」は「幸い」で運を天に任せようとする意味か。絵札では弓を手にしており、付喪神のようなものとして描かれていると思われる。あるいは合戦時のおとりとして用いられていた人形に恨みや念がこもり、妖怪となったか。

なお「藁人形」は17番（以津真天）同様、当研究会で暫定的に特定した化け物である。この点については今後も検討が必要である。

#### 【欠損の諸問題】

当研究会で取り扱ったかるたは、読み札計三十四枚、絵札計三十五枚であった。本来は一式各三十六枚のかるたであるとするならば、読み札二枚、絵札一枚足りていない。欠損が想定される読み札二枚は、それぞれ藤原朝忠と中務の詠歌を本歌としている。



現存する読み札は、17番（以津真天）の読み札を除き、すべての絵札と対応を暫定的に確認・想定している。絵札一枚分の欠損はその読み札との対応が期待されるものである。

また、20番に挙げられた絵札（かわ太郎・かわうそ）については、欠損札ではないものの、複数の読み札との対応を想定しつつ、札が欠損した場合にも遊ぶことが出来るかるとして考察を示した。

対応が確認できない絵札が二枚残ることとなったが、これらの絵札は前述の欠損分二枚の読み札と対応関係にあると思われる。以下に読解の内容を示しておく。

### 34 火鉢



### 鑑賞

当研究会では、当該絵札と対になる読み札は現時点では確認できないとした。

絵札には人面と腕二本を備えた鉢の様なものが描かれている。上には毬栗型のもものが描かれており、何か飛び出しているようである。

ここでは鉢の中に点々で描かれているのを灰だと見て、火鉢ではないかとした。上にある毬栗型のものから飛び出ているのは蒸気か何かだろう。

火鉢は、暖房具として用いられており、古くは火桶や火櫃ともいった。絵札の火鉢を見てみると何か簡易的な調理のためにも用いられていたのだろう。片腕を上にあげ、顔は口角をあげている様子から鉢の中の毬栗型のものを取って食おうとしているのかもしれない。

かるたの化け物は総じて「付喪神」的なものが多いようであったが、これもそのような系統だろうと思われる。



鑑賞

当研究会では、当該絵札と対になる読み札は現時点では確認できないとした。

絵札に描かれているのは、井戸と女である。女の姿は、白装束に三角の額当てと長い髪の毛で描かれており、現代思い浮かべられる典型的な女性幽霊の姿である。

女性は井戸から出てきているようだが、井戸から出てくる幽霊といえは『播州皿屋敷』など皿屋敷の伝説で有名な「お菊」が筆頭にあげられる。皿屋敷は、パターンや背景などは色々だが、皿を逸失したり毀損したりしたお菊がそれを咎められて殺され、井戸に捨てられたのが亡霊となって皿の枚数を数えると

というのが大筋である。江戸時代の巷説として広く流布し、瀬戸内海地域では播州が伝承地としても非常に関係深い。

多田克己氏『江戸妖怪かるた』にあげられた化物かるたの中の一枚には「井戸から出る皿屋敷」として井戸から皿屋敷のお菊が出てくるという点で一致しており、類似のものといえる。

当研究会では、試みにかるたを「付喪神」「名のある怪異」「その他」として分類したが、この絵札に描かれているのは「名のある怪異」で、歌を併せればその名前も容易に想像できるものであろう。

結

『ばけ物三十六歌仙』は妖怪と和歌を結びつける知的遊戯性に加え、昔話・俗信・行事などに関わる伝承の要素が多分に認められるからである。身近な生活道具が姿を変えた付喪神、正月子の日の遊び、そして個々の化け物をめぐる多様な情報が三十六歌仙の本歌に基づき見事な遊具に置き換えられている。

絵札にありがちな一文字が記されていない点、化

け物の名称が必ずしも読み札に詠み込まれていない点などは、読み手と取り手がその関係性から即興的に共有してゆく解釈の広がりや、遊び方の自由度にもつながる。時代とともに重なり合いながら少しずつ変わりゆく情報も、化け物の変貌だけでなく遊戯の伝承を支える手助けにもなり得た可能性がある。伝承の過程における数枚の欠損が使用不可能という結果を生み出すのではなく、むしろ不完全な形態が自由な解釈に結びつくことも十分あり得る。一枚の読み札に対し複数の絵札を関連づけて両方の解釈を良しとするならば、年始めという祝賀行事の合間、数枚の欠損もさほどの問題とせず、片手に収まる小さな札をやり取りして言語遊戯に興じた人々の姿を想像することもできる。

海賊村上家に伝来する数多の資料の中で、当該資料は一族の遊び心を兼ね備えた教養・知識の伝承と結びつく異質な伝来品である。札の欠損に伴う読解上の問題は残るが、むしろその障壁が伝承をめぐる遊び方の広がりや、札が持つ多様な可能性にもつながる。日本の伝承文化を支える類い稀な逸品が瀬戸内に残された意義は大きい。

なお、かるたの附録として目録に記載される小冊

子一冊についても触れておく。本稿末尾に部分掲載する写真の通り、小冊子の破損は甚大であるが、かろうじて表紙の題簽「七ふくしん」（七福神）の判読が可能である。祝い酒、春駒、大黒天、独楽回し、亀等のような「めでたづくし」の内容からは、『ばけ物三十六歌仙』と併せて正月用室内遊具、図書の一つとして位置づけることができる。

本稿により、まずは化け物と和歌が織り成す豊かな世界をお楽しみいただき、海賊の正月に思いを寄せていただければ幸いである。

#### 【注】

(1) 『今治市村上水軍博物館保管 村上家文書調査報告書』（今治市村上水軍博物館編、愛媛県今治市教育委員会刊行、二〇〇五年三月）

(2) 村上海賊ミュージアム保管の常光徹氏所見

資料名 ばけ物三十六歌仙

保存先 愛媛県今治市立村上水軍博物館

制作年代 江戸時代（後期か）

内容

カルタ69枚…（材料 紙・読み札34枚・絵札35枚）

読み札2枚、絵札1枚が欠損

多色刷り・汚れ、シミ有

外箱（材料 木・縦11.8×横8.4cm 高さ？） 底部に破損有

三十六歌仙の歌をもじった読み札と化物の図柄の絵札からなる妖怪かるた（お化けかるた）。天明年間（1781～1789）の頃に上方に登場した「いろはかるた」は人気を得て広く流布した。諺や譬えを「いろは」47文字の仮名を用い、「ん」の代わりに「京」の字を入れて48枚一組としたものである。「いろはかるた」が受容されていく過程で、諺や譬えに代わって妖怪や幽霊・怪異などを讀んだ「妖怪かるた（お化けかるた）」が生れた。登場は江戸時代後期と考えられている。おそらく「ばけ物三十六歌仙」も「妖怪かるた」の系譜につながるものと考えられる。具体的な内容については今後の調査を待たねばならないが「ろくろ首」や「ぶんぶく茶釜」など知名度の高い化物も多く描かれており、江戸後期の「化物づくし」などとの比較が必要であろう。管見の及ぶ範囲では三十六歌仙をもじった「妖怪かるた」はこれまで報告がなく、その意味でも貴重な資料である。

例 読み札

在原業平朝臣「世のなかにたへて久しき ふんぶくの茶かまも 春ハのどかからまし」

（本歌「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」）

絵札・ぶんぶく茶釜

平成22年 12月9日 常光徹

### 【参考文献】

○書籍

・『和歌文学大系2 萬葉集』 稲岡耕二著 明治書院 二〇〇二年

・『和歌文学大系32 拾遺和歌集』 増田繁夫著 明治書院 二〇〇三年

・『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』 小沢正夫／松田成穂校注・訳 小学館 一九九四年

・『新編日本古典文学全集19 和漢朗詠集』 菅野禮行校注・訳 小学館 一九九九年

・『新編日本古典文学全集43 新古今和歌集』 峯村文人校注・訳 小学館 一九九五年

・『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』 片桐洋一校注 岩波書店 一九九〇年

・『決定版 日本妖怪大全 妖怪・あの世・神様』水木しげる 講談社 二〇一四年

・『幻想世界の住人たちⅣ（日本編）』多田克己著 新紀元社 二〇一二年

・『鳥山石燕 画図百鬼夜行全集』鳥山石燕著 株式会社KADOKAWA 二〇〇五年

・『日本昔話事典〔縮刷版〕』稲田浩二／大島建彦／川端豊彦／福田晃／三原幸久編 弘文堂 一九九四年

・『日本怪異妖怪大辞典』小松和彦監修 東京堂出版 二〇一三年

・『47都道府県・妖怪伝承百科』小松和彦／常光徹監修 丸善出版株式会社 二〇一七年

・『和漢三才図絵』寺島良安編 東京美術 一九七〇年

・『江戸妖怪かるた』多田克己編 国書刊行会 一九九八年

○ジャパンナレッジより

・『日本語大辞典』『日本大百科全書』『全文全訳古語辞典』『デジタル大辞泉』

○データベース

・『国際日本文化研究センター 怪異・妖怪伝承デー

データベース』

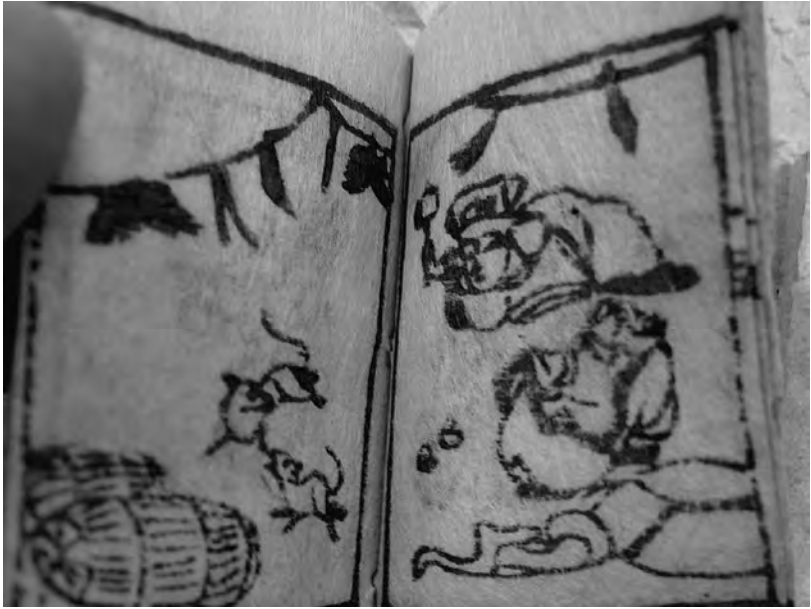
<https://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/0550120.html>

・『国際日本文化研究センター 怪異・妖怪画像データベース』

<https://www.nichibun.ac.jp/YoukaiGazouMenu/index.html>

【附録 小冊子】（縦5.3糎 横3.2糎）









索引  
五十音

歌人名

※要検討札  
番号

あ	在原業平朝臣	ありわらのなりひら	15
	伊勢	いせ	16
	凡河内躬恒	おおしこうちのみつね	1
	大伴家持	おおとものやかもち	30
	大中臣能信朝臣	おおなかとみのよしのぶ	17
	大中臣頼基朝臣	おおなかとみのよりと	2
	小野小町	おののこまち	18
か	柿本人麿	かきのもとひとまる	3
	紀貫之	きのつらゆき	19
	紀友則	きのともり	※ 20
	清原元輔	きよはらのもとすけ	32
さ	斎宮女御	さいぐうのにようご	4
	坂上是則	さかのうえのこれのり	21
	猿丸太夫	さるまるだゆう	22
	三条院女蔵人左近	さんじょういんおんなくろうどさこん	23
	僧正遍昭	そうじょうへんじょう	5
	素性法師	そせいほうし	6
た	平兼盛	たいらのかねもり	7
は	藤原敦忠	ふじわらのあつただ	24
	藤原興風	ふじわらのおきかぜ	8
	藤原兼輔	ふじわらのかねすけ	25
	藤原清正	ふじわらのきよただ	9
	藤原高光	ふじわらのたかみつ	26
	藤原敏行	ふじわらのとしゆき	27
	藤原仲文	ふじわらのなかふみ	10
	藤原元真	ふじわらのもとざね	11
ま	源公忠朝臣	みなもとのきんただ	28
	源信明朝臣	みなもとのさねあきら	12
	源重之	みなもとのしげゆき	29
	源順	みなもとのしたごう	※ 20
	源宗于朝臣	みなもとのむねかた	13
	壬生忠見	みぶのただみ	33
	壬生忠岑	みぶのただみね	31
や	山部赤人	やまべのあかひと	14

索引  
五十音

化物名

※要検討札  
番号

あ	灰汁桶	あくおけ	5
	行燈	あんどん	14
	石灯籠	いしどうろう	9
	以津真天	いつまで	17
	井戸から出る幽霊	いどからでるゆうれい	35
	團	うちわ	3
	うわばみ	うわばみ	19
	大たこ	おおたこ	32
	鬼	おに	27
か	蕪	かぶ	31
	唐傘	からかさ	26
	かわうそ	かわうそ	※ 20 乙
	河太郎	かわたろう	※ 20 甲
	狐	きつね	30
	五位さぎ	ごいさぎ	18
さ	酒たる	さかだる	11
	酒壺	さけつぼ	2
	三味線	しゃみせん	4
た	高入道	たかにゆうどう	25
	たらい	たらい	10
	提灯	ちょうちん	7
	ちろり	ちろり	13
	土蜘蛛	つちぐも	24
	釣行灯	つりあんどん	8
な	猫又	ねこまた	21
は	はねつるべ	はねつるべ	12
	火鉢	ひばち	34
	狒狒	ひひ	22
	風神	ふうじん	23
	古狸	ふるだぬき	29
	古鞠	ふるまり	6
	風呂桶	ふろおけ	1
	分福茶釜	ぶんぶくちやがま	15
や	山姥	やまうば	28
ら	ろくろ首	ろくろくび	16
わ	藁人形	わらにんぎょう	33

【付記】

本稿は二〇二〇年九月二日に藤井が撮影した写真  
を元に、二〇二一年度の伝承文化研究会において読  
解を進めました。お気づきの点は御教示いただけ  
れば幸いです。貴重な資料の撮影及び掲載の御許可  
をくださった今治市村上海賊ミュージアムに記して  
お礼申し上げ、展示物にかかわる情報をご提供くだ  
さった国立歴史民俗博物館・博物館事業課資料係に  
も併せてお礼申し上げます。

- ― たかすぎ・ゆうは 日本文学科三年生 ―
- ― なご・りょうが 日本文学科三年生 ―
- ― ひらた・さほ 日本文学科三年生 ―
- ― みやけ・はるか 日本文学科三年生 ―
- ― さかい・うみ 日本文学科四年生 ―
- ― ふじい・さみ 日本文学科教授 ―